

研究者イチオシ コレクション

ウガンダ研究と 史資料

—インド系ウガンダ人の
軌跡を追って

吉田 栄一

ところで、ウガンダ研究者が先ず向かうのはマケレレ大学図書館であろう。マケレレ大学（学生数約四万人）には四三万の蔵書を持つ大学図書館がある。ここは国立レファレンスセンターを兼ねており国内の出版物、新聞は全て保存されることになっている。大学図書館に隣接して東アフリカ図書館情報大学校も設置されている。

大学内には海外のウガンダ研究者を積極的に受け入れているマケレレ大学社会調査研究所（MISR）があり、そのMISR図書室にも史料コレクションがある。MISRは一九四八年に英国植民地社会科学研究評議会によって植民地に設立された三研究機関のひとつで、現在はコロンビア大学アフリカ研究センター長・マームド・マムダニ教授が所長を兼任している。このマムダニ教授もアミン独裁期に国外に出たウガンダ生まれのインド系人である。MISR図書室には、関連図書約一万冊の他に、地方分権化資料センターが設置され、サブサハラアフリカにおいて早期から地方分権化を進めてきたウガンダの知見が検索できるようなるはずである。

マケレレ大学以外で、インド系人の史資料探しに利用したのはウ

ガンダ協会図書館とウガンダ基礎研究センター資料室（CBR）であった。ウガンダ協会とは一九二三年に植民地官僚やウガンダ研究者など有志で設立された団体で、一九三三年より調査研究誌『ウガンダジャーナル』を刊行している。

一九六三年にはフォード財団の支援で協会図書館をウガンダ国立博物館に設置した。ここには植民地期以来の約三〇〇〇の地図、雑誌、写真などのコレクションがある。またウガンダ基礎研究センターCBR資料室は一九八七年に設置された民間調査機関の付置図書館で、初代所長はMISRの現所長マムダニ教授であった。

なお、インド系人の調査はウガンダ国内では調べ尽くすことができず、結局ロンドンの大英図書館に残されている植民地期の商工名鑑をめくり、

ンダから国外退去したインド系人が大量流入したロンドン郊外ブレント地区のイーリング図書館にはその流入と定住に関する資料が収集されていた。

アミン独裁政権崩壊後、新政権はインド人企業家の資産返還などの制度を整えた。その結果一九八〇年代半ば以降マドバニなど財閥企業が復興したが、残念ながらインド人木工技術者は帰還せず、代わりに南アフリカと韓国の家具企業が進出した。そしてウガンダ人木工職人はそれぞれの工房でインド人技術者が残した技術とデザインを受け継ぎ、コロンリアルスタイルの家具をつくり続けている。

（よしだ えいいち／アジア経済研究所地域研究センター）

アジ研でウガンダ研究を始めてしばらくはカンパラの家具工房と木工職人について調査していた。木工技術を職人らがどう習得したのかと思い現地で尋ねたところ、アミン独裁期にインド系人が国外追放される迄は、カンパラにインド系の家具工房が点在していたとのこと。そこで技術習得し、また技術者が国外退去した主無き工房を受け継いだのだという。

そこでウガンダのインド系木工職人がいつ頃どこから来て、カンパラのどの場所に立地して、何を製造したのか、また国外退去した後、再度ウガンダに戻ったのか等、インド系技術者の軌跡を追うべく植民地期以降の商工会資料や商工名鑑の類の史料収集を試みた。



マケレレ大学



ウガンダ協会図書館は国立博物館に増築して設置された。（手前のウィングが図書室）